

聖書:第一列王記14章21～31節

説教:母の名はナアマ

はじめに

イスラエルは、ソロモンが王であったとき経済的に最も繁栄した時代を迎えました。海外からは貴重な品々がどんどん輸入され、ソロモンが飲み物に用いる器はすべて金でできており、金の延べ板を使って数多くの盾を作って宮殿の所蔵庫に飾る。今で言えばバブルの時代であったと言えるでしょう。しかし物事には日の当たるところもあればその一方に日の当たらぬ所もあります。この経済的な繁栄を支えるために多くの国民が犠牲を払わなければなりません。その不満はしばらくは表に出て来ませんでしたが、ソロモンが亡くなったとき噴出し、とうとう北王国と南王国の二つに分裂してしまいます。

前回までは北王国の王となったヤロブアムの生涯を中心に見てきました。きょうは目を転じて南ユダ王国の王となったレハブアムがどのような生涯を送ったのかを見てまいります。

1 レハブアム

1) ソロモンの子

21節。「ユダではソロモンの子レハブアムが王になっていた。レハブアムは四十一歳で王となり、主がご自分の名を置くためにイスラエルの全部族の中から選ばれた都、エルサレムで十七年間、王であった。彼の母の名はナアマといい、アンモン人であった。」

ソロモンは智恵ある人と言われたのですが、子どもの育て方においては理想的な父親ではなかったようです。ダビデもそうでしたが、なぜかイスラエルの王は子どもの育て方に問題を抱えることが多い。

レハブアムが父の跡を継いで王となろうとしていたとき、北側に住む人々がやってきて「このままではやってられないので、是非税金を軽くして欲しい」と願いを起こされました。このような問題は慎重に対応するようにとのアドバイスを聞いていながら、彼はかえって強い口調で民の願いを拒絶してしまい、このことがきっかけでイスラエルは北と南に分裂してしまいました。父親が持っていたような知恵はどこにもありません。

2) 異教の神々を拝む

とは言いましたが、最初からなにもかも駄目だったというわけではない。並行箇所第二歴代誌11章を見ると、レハブアムは王になった最初の三年間はダビデとソロモンの道を歩んだと書かれている。ところが王として強い権力をふるうようになり、国も安定してくるとじょじょに主の律法を守らなくなります。そんな王さまの態度を国民はきっちりと見ていますから、王が律法を捨てれば国民もそれに倣う。それでどうなったか。24節。「この国には神殿男娼もいた。彼らは、主がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、すべての忌み嫌うべき慣わしをまねて行っていた。」

聖書に書かれていることは、私たちにしてみればはるか昔の遠い外国のことですから、まったくなじみがないように思ってしまう。ところがよく読むと日本の文化とそっくりなところがある。

日本人は、初詣には神社に行き、葬儀は仏教で行い、結婚式はキリスト教です。外国の方からは理解できないと言われ、私は日本人は特殊なのかと思ったこともあります。ところがどうもイスラエルでも同じことをしていたらしいのです。

イスラエルは、言うまでもなく先祖代々アブラハムに現れてくださった唯一の神主だけを信じる民族です。ところがエジプトを逃れて、荒野を旅しながら約束の地であるカナンに入ると、その土地にもとからあった宗教の影響を強く受けるようになる。それでどうなったか。人々は、お祭りの時期が来ればエルサレムにある神殿に行き行って礼拝します。その一方で、普段は神々の像を刻んだ石の柱やアシェラ像を立てて、それを拝んでいる。日本でしているのと変わりません。少し親近感が湧いてきます。

2 主がご自分の名を置くエルサレム

1) ソロモンが建てた神殿

神はこのことをどのようにご覧になっていたのか。22節。「ユダの人々は主の目に悪であることを行い、彼らが犯した罪によって、その先祖たちが行ったすべてのこと以上に主のねたみを引き起こした。」

モーセの十戒の最初のことばに、「あなたには、わたし以外に、ほかの神々があってはならない」とあります。それなのにほかの神々を公然と拝んでいるのですから、神がねたむのは当然でしょう。でももう一つ神がねたむ理由がある。21節にこう

書かれていることに注目します。「主がご自分の名を置くためにイスラエルの全部族の中から選ばれた都、エルサレム。」これはどのような意味なのか。引っかけります。

話はダビデの時代にまでさかのぼります。あるときダビデが自分の手で神殿を建てるべきかどうか、預言者ナタンに相談したことがある。そのとき主がナタンに語ったことばはこうでした。第二サムエル記7章12, 13節。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

「彼はわたしの名のために一つの家を建て」の「彼」とはだれか。ソロモンが神殿を建てたのですから、これはソロモンのことであることはだれもが思うわけです。

2) 主のからだ

ところが一つの問題が残ってしまう。「わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」「とこしえ」とは永遠のことです。ではイスラエルはどうなったか。二つの国に分裂し、やがて北王国はアッシリヤに、そして南王国もそれに続いてバビロニアに滅ぼされてしまいます。全然「とこしえ」どころではない。もちろん神のことばに誤りはありません。そうしますと、ここの「彼」とはソロモンではない。それはだれか。後になってイエスが来られ、「神殿」とはイエスご自身のからだのことであり、「とこしえまでも堅く立てる」とは、主のよみがえりのことを教えてくださいました。

3) エジプトが奪っていく

そうしますと、エルサレムというのは主が救いのみわざを成し遂げてくださる大切な都ということになる。ところがそのエルサレムは、いまエジプトの軍隊に攻められ、ソロモンが築いた財宝を奪い取っていく。もちろんその原因は、レハブアムの罪にあります。彼は主を捨てて悪を行い、先祖たちが行ったすべてのこと以上に主のねたみを引き起こすほどひどいことをした。その結果、さばきとしてエジプトが攻めてきた。

でもなぜレハブアムは主を捨てたのでしょうか。なぜこうユダの人々はやすやすと異教の神々を拝むようになったのか。

3 母の名はナアマ

1) アンモン人

その原因はレハブアムの母ナアマにあります。この人はアンモン人であった。そのことが二度繰り返されています。このアンモン人についてはモーセが申命記23章3節で警告していました。「アンモン人とモアブ人は主の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して主の集会に加わることはできない。」その理由については、イスラエルが荒野を旅していたときにイスラエルを呪い、パンも水もくれず助けようとしなかったからだと言明されています。

あの知恵に富んでいたソロモンがこのことを知らないわけはありません。知っていたのに、アンモン人ナアマを妻に迎え、ナアマが拝んでいた神々がイスラエルに持ち込まれます。これについても既にモーセが警告していたのです。申命記12章2, 3節。「あなたがたが追い払おうとする異邦の民がその神々に仕えた場所は、高い山の上でも、丘の上でも、また青々と茂るどの木の下でも、それをことごとく破壊しなければならない。彼らの祭壇を打ち壊し、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を火で焼き、神々の彫像を切り倒して、それらの名をその場所から消し去りなさい。」

それにもかかわらず、母親が拝んでいたものを息子であるレハブアムも拝み、やがてユダの人々も進んで拝むようになる。こうして主の目に悪であることを行っていきました。

2) 罪の影響

では、私たちはレハブアムのことをどう考えたらよいのでしょうか。彼のために少し弁護すれば、悪いのは父であるソロモンだと言えるかも知れない。してはいけないと言われたのにアンモン人と結婚したからこうなったのだ。そう言いたくなる。私も若い頃父親を憎み、こんな父親のようにはならないと心で誓っていました。ところが今度は自分が子どもを育てるときになって、自分もかつての父親と同じことをしているのに気がつき、愕然としたことがあります。自分で気がついている以上に親の影響は大きい。こんな子どもにどうして育てたのだと文句を言いたくなる。

けれども聖書はまったく違う見方をします。子どもたちが親や先祖の悪い影響を受けることを認めはしても、「子どもであるあなたには罪がない」とは言いません。「親がどうのこうのと言う前にあなたはどうか。あなた自身は罪を犯していないのか、犯したのか。」この質問の前に平気でい

られる人はいないはずです。神はどうしてこのような厳しい問いかけをするのでしょうか。

3) ダビデの子孫として来られた主

私たちは被害者ではなかったのか。親や先祖のことで少なからず苦しんでいる人たちが実際にいます。その理由は様々です。ことばの違い、肌の色の違い、民族の違いから始まって、犯罪者が親族にいる。精神的に病んでいる。遺伝的な病気を持った人がいる。人に言えない職業に就いている人がいる。自分の血を憎むと言う人さえいます。当たり前のことですが私たちは親を選ぶことができません。

ダビデはバテ・シェバに夫があると知りながら強引に自分の妻にし、結果生まれたのがソロモンです。そのソロモンはアンモン人の妻ナアマとの間にレハブアムを生みます。ダビデの家族もこうして見ると罪にまみれています。そんな家系の中から、レハブアムの家系からイエス・キリストはお生まれになったことを聖書ははっきりと書きます。

神である方は、罪のない方なのに罪ある者と同じ姿になられたと聖書にあります。どこまで同じになられたか。イエスの先祖をたどれば、異教の神々を拝んでいたアンモン人がいる。異教の神々を拝んだレハブアムがいる。こうして見ると主イエスは、罪のど真ん中に立ってくださったとも言えます。もともと汚れた場所に主は立っておられる。自分の血が憎いと思う者のためにも、主は同じ姿となってくれた。

「主がご自分の名を置くために選ばれた都エルサレム。」その都の中で異教の神々が拝まれていく。それでも神はエルサレムを捨てない。その罪の真ん中に十字架をお立てになってくださいました。そのようにして罪の中から私たちを救い出してくださいました。主の御名をあがめます。